

# 魅力的な道徳の授業を進める指導の工夫

## —地域の素材を生かした道徳資料の開発—

田原本町立南小学校 教諭 小 泉 伸 美

Koizumi Nobumi

### 要 旨

道徳の授業を魅力的なものにする要素の一つに資料がある。子どもが感動を覚え、それを基にした話し合いの中で道徳的価値の自覚が深められる資料を開発していくことが魅力的な授業づくりにつながると考える。そこで、地域の素材を使った資料を開発し、その意義や効果について授業研究を基に考察した。

キーワード： 道徳の時間、新学習指導要領、地域の素材、自作資料

## 1 はじめに

平成20年3月に公示された新学習指導要領では、小学校の道徳の時間の目標に「自己の生き方について考えを深め」という文言が加えられ、道徳の時間の充実に向けた配慮項目の一つに「先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツなどを題材とし、子どもが感動を覚えるような魅力的な教材開発」が挙げられている。

これは、中教審答申で、「生命尊重の心の不十分さ、自尊感情の乏しさ、人間関係を形成する力の低下など、子どもの心の活力が弱っている傾向が見られる」、「小・中学校の道徳の時間については、指導が形式化している、学年の段階が上がるにつれて子どもたちの受け止めがよくない」などの課題が指摘され、教育内容の改善事項として道徳教育の充実が挙げられたからである。よりよい生き方が学べ、待ち遠しいと子どもが思えるように、道徳の時間を魅力的な時間としていくことが今、求められている。

道徳の時間を魅力ある時間とするための要素の一つが、魅力的な資料である。子どもにとって内容を自分のこととしてとらえられ、感動が得られるような資料、よりよい生き方について深く考えていける資料を基にした話し合いの中で、より深く道徳的価値を自覚し、子どもが魅力を感じる授業になると考える。

今回は、身近な地域の素材を扱った資料に焦点を当て、その意義、効果について実践を通して考えることにした。

## 2 研究目的

魅力ある道徳の時間をつくるために、地域の素材を生かした資料の開発と効果について考察する。

## 3 研究方法

- (1) 地域の素材を生かした資料の開発
- (2) 道徳の時間の実践と考察

## 4 研究内容

### (1) 地域の素材を生かした資料の開発

#### ア 道徳の時間における資料の意義

道徳の時間は、学校の教育活動全体を通して行われる道徳教育の要として、それを補充、深化、統合する役割をもつ。子どもたちが学校の教育活動や生活の中で様々な人と出会い、多くの体験を積み重ね感じてきた道徳的価値の自覚を深め、自己の生き方についての考えを深めていく時間である。その手掛かりとなるのが、読み物などの資料である。

道徳の時間における資料の意義は、次のように考えられる。

- ・資料と出会うことで、自分の行為や気付きを改めて振り返るきっかけとなる。
- ・自分のことを素直には表しにくいものであるが、資料の中の登場人物を介せば、自分の考えや価値観を表しやすくなる。
- ・資料の具体的な場面や状況を基に学級全体が共通の土俵で話し合うことができる。

資料の中の登場人物の行動や考えに共感したり、批判したりする中で、子どもは多様な見方や考え方に触れることになり、友達や家族、先生、地域の人など周りの人とのかかわりをより深く考えることにつながっていく。

#### イ 地域の素材を生かすことについての基本的な考え方

地域の素材を扱った資料であれば、子どもたちはその人物や自然、文化等をより身近に感じ、興味・関心を強くもって学習に取り組むことができる。

「身近」という言葉を広辞苑で調べると、「①自分の身に近いこと、身に近い所。②自分と関係が深いこと、日常慣れ親しんでいること。」とある。自分たちが住んでいる地域の生活や文化、先人を取り上げた資料であれば、子どもは、地域での自らの体験と結びつけたり、具体的な情景を思い浮かべたりできるので、より親しみがもてるということになる。

しかし、地域の素材であればどんなものでもいいというわけではない。道徳の時間に扱うのであるから、人としての生き方について考えられる資料でなくてはならない。また、子どもの発達段階に合ったものでなくてはならない。地域の素材が扱われ、子どもの環境や経験、意識を踏まえた資料であれば、子どもたちは、自分のこととして考えていくことができるであろう。また、それらの資料を基に話し合うことを通して郷土を大切にすることを心をはぐくむことにもつなげられると考える。

#### ウ 資料の開発

##### (7) 素材の収集

幅広く道徳資料を選択し開発していくためには、地域の民話や昔話、地域の産業、地域の祭りや年中行事、遺産、名所、遺跡など、ふだんから多様な素材群に着目していく必要がある。広報や新聞に載っていれば残しておくなど、様々なことにアンテナを張りめぐらせておかなければならない。

今回、教材化した萩原善太郎氏は、子どもたちが3・4年で使用した社会科の副読本『わたしたちの田原本町』に取り上げられていた人物である。今回、萩原氏の自伝等の資料も手に入れることができたので、資料化に取り組んだ。

##### (4) 素材の検討

素材の資料化に当たっては、『小学校学習指導要領解説 道徳編』に記されている、

- ・人間尊重の精神にかなうもの
- ・ねらいを達成するのにふさわしいもの

- ・児童の興味や関心、発達に応じたもの

等の道徳の時間に用いられる教材の具備すべき要件や、

- ・生や死の問題、先人が残した生き方の知恵など人間としてよりよく生きることの意味を深く考えさせられるもの
- ・体験活動や日常生活等を振り返り、道徳的価値の意義や大切さを考えることができるもの

等の「児童がより学習に意欲的に取り組み、学習の充実感をもち、道徳的価値の自覚を深めることができるようにする」ために教材が具備する要件を基に検討していった。

#### **a 道徳的価値の視点から**

萩原善太郎氏はスイカ作りにおいて、常に現状では満足せず、理想とするスイカを目指して取り組み続けた人である。嫌なことを言われても、戦争という状況の中でも負けることなく、自分の理想とするスイカを作るために努力し続けていった。そのような萩原氏の生き方に会うことを通して、「より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する」という生き方の大切さについて子どもたちは考えることができる。また、指導者自身が萩原氏の生き方に強く心を動かされ、子どもたちに萩原氏の生き方を是非見つめさせたいと考えた。

#### **b 子どもの実態から**

子どもたちの様子を見てみると、好きなスポーツをしていても、練習が厳しくなると、すぐにやめてしまったり、運動会の組み体操や鉄棒の技など、新しいことに対して、「どうせ、ぼくにはできない。」とすぐにあきらめてしまったりしている。今までやったことがないことやしんどいこと、つらいことに出会ったときにすぐにあきらめてしまうという子どもの実態がある。そこで、萩原氏のねばり強さや意志の固さなど、萩原氏の生き方に触れさせたいと考えた。

#### **c 子どもの経験の視点から**

子どもたちは、校区の畑でスイカの種取りのために多くのスイカが割られているのを日常的に目にしている。また、中学年の社会科等の学習を通して地域でスイカ作りやスイカの種取りが盛んであること、そこに萩原善太郎氏の存在があったことを知っている。さらに、萩原氏のスイカ作りでは、品種改良がキーワードとなるが、5年生の社会科での既習内容であることから、資料の内容の理解が十分でき、萩原氏を身近に感じられるものとなると考えた。

### **(4) 素材の資料化**

萩原氏の日記を基にした著書『西瓜人生』や富研連盟全国協議会発行の『生い立ちと歩み』というパンフレットには数々のエピソードが記されている。甘いスイカを作りたい、丈夫なスイカを作りたい、質のよいスイカを多くの人に食べてもらいたいと、常に理想を高くもち、取り組み、悪口を言われたり、スイカを作ることができなくなったりするような状況になっても、希望と勇気をもって、あきらめずに努力し続けたエピソードを組み合わせ資料化していった。

内容については、子どもたちが萩原氏の生き方について考えられるよう、エピソードを描きすぎないように簡略化に心がけた。

なお、補助資料として萩原氏が開発したスイカの写真や萩原氏自身の写真等を活用した。

## (2) 道徳の時間の実践と考察

### ア 授業の概要

- 主題名 より高い目標に向かって 1 - (2)
- 資料名 スイカにかけた人生 (自作資料)
- ねらい 萩原善太郎さんは、現状に満足せずより高い目標をもち、くじけずに努力し続けた人である。その姿や生き方について話し合うことを通して、希望や勇気をもってあきらめずに精一杯努力しようとする態度を育てる。
- 展開

	学習活動	主な発問と児童の発言	指導上の留意点	備考
導 入	1. 総合的な学習の時間で学習したことを思い出す。	○ 田原本町ではどんな野菜や果物が作られていますか。 ・イチゴ ・ナス ・スイカ	・田原本町で作られている農作物から、前学年での学習を想起させ、本時の学習への関心を高める。	
展 開	2. 資料「スイカにかけた人生 萩原善太郎」を読んで話し合う。	○ 「貧乏したけりゃ、萩原の農業を見習え。」と言われたとき、善太郎はどんな気持ちだったと思いますか。 ・見返してやる。 ・何を言われてもこの方法をやめない。 ・ぜったいにいいスイカを作る。 ○ 『富研号』ができたとき、善太郎はどんな気持ちだったと思いますか。 ・やっといいスイカができた。 ・食べてもらいたい。 ・もっと挑戦したい。 ○ 毎晩、水やりをしているとき、善太郎はどんなことを考えていたでしょう。 ・いつになったら実ができるの。 ・がんばって育てくれ。 ・早く、実ができたらいいな。 ◎ なぜ、スイカの種を全国に広めることができたのだと思いますか。 ・善太郎の熱い思いと、何があってもあきらめない気持ちがあったから。 ・努力を重ねて、自分が納得いくまで作るという意志が強かつ	・周囲からさまざまなことを言われても挫折せず、耐えていたときの善太郎の気持ちについて考えられるようにする。 ・自分の理想を求めて作りあげた善太郎の気持ちを考えさせる。 ・再びスイカを作るため水をやり続けた善太郎の情熱を感じ取らせたい。 ・スイカの種を全国に広めることができた理由を考えることによって善太郎の生き方を見つめ、自分も高い目標をもち、常に努力しようとする姿勢をもてるようにする。	善太郎の写真  富研号の写真  ワークシート

	3. 自分の生活を振り返る	<p>たから。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・もうけることだけでなく、人に喜んでもらいたいという善太郎の気持ちが伝わったから。</li> </ul> <p>○ 今、どんなことをがんばっていますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・苦手な勉強、スポーツ</li> </ul>		
終末	4. 教師の話を書く。		・余韻を残して終わるようにし、実践意欲を高める。	

○ 事前、事後の指導

- ・2学期当初に、今学期にがんばること（目標）を考え、学級全体で確認した。
- ・2学期途中に、2学期当初に決めた目標の見直しをした。
- ・道徳の時間の後、目標を振り返り、成果やがんばり続けた理由などを書かせた。

○ 資料

はぎはらぜんたろう  
 スイカにかけた人生 萩原善太郎

夏、稲が青々と育つ水田の横の畑には、たくさんのスイカが実っています。田原本町では、むかしからスイカ作りがさかんに行われ、今も田原本町でとれたスイカの種が全国へ送られています。どうして田原本町のスイカの種が全国に広まったのでしょうか。それは、「スイカ名人」と呼ばれたはぎはらぜんたろう萩原善太郎という人の努力があったからです。

善太郎は、明治28年、川東村（今の田原本町）の農家に生まれました。善太郎がスイカ作りに一生をかけるきっかけとなったのは、21才のときにかかったインフルエンザでした。お見まいに「アイスクリーム」という品種のスイカをもらった善太郎はそのあまさにびっくりしました。（こんなおいしいスイカを自分も作りたい。）

と思い、スイカ作りを力を入れていきました。

まず、善太郎はスイカの早熟さいばいに取り組みました。その時代には、まだめづらしい温室でのスイカ作りを始めました。温室にするためのガラスばりのフレームを買うためには、たくさんのお金がかかりました。そのため、善太郎は先祖から受けついで田畑を次々と売っていきました。それを見た村の人たちは、  
びん「貧ぼうしたけりや、はぎはら萩原の農業を見習え。」  
わら「あんなことしても、ええスイカができるもんか。」  
とばかにして笑いました。

しかし、わら笑われてもわら笑われても善太郎はその方法をやめませんでした。

ある年の田植えも終わらない6月末、善太郎のスイカ畑は食べごろのスイカでうめつくされていました。それを見た村の人たちはあっとおどろきました。なにしろ、ほか他のスイカ畑の実はまだ小さかったのですから。善太郎は早熟さいばいに成功したのです。

ところが、そのときには、善太郎はもう次のことを考えていました。

（もっとあまいスイカが作れないだろうか。）

ある時、スイカのかぶにいつもと大きさのちがう小さなスイカができているのを発見しました。

「おや、これは何だろう、めづらしいものができたぞ。」

切って調べてみると、実はあざやかな赤色で、食べるとあま味もありました。（この種をうまく育てたら、今より

ももっととあまいスイカができるかもしれない。)と思い、その種で何年もスイカの試作をくり返していったのです。こうして、善太郎は熟すとあまい大きなスイカを作りあげました。

しかし、善太郎はそれでも満足しませんでした。これまでもあまい品種のスイカがあったのですが、それは皮がもろく、運ぶ途中で割れることがありました。そこで、善太郎は、

(あまくて、やわらかい、運ぶ途中で割れないじょうぶなスイカを作りたい。)

と考えたのです。善太郎は品種改良にちょう戦していきました。たくさんの品種の中から、どれをどうかけ合わせれば思いえがくスイカになるのか考え続けました。そのころの善太郎のスイカに対する思いは、どんなスイカを作ればもうかるかではなく、どうしたら自分の思いえがくスイカを作りあげることができるかというものでした。うまくいくか分からない不安とも戦いました。そして、とうとう善太郎の思いが通じ、理想とするスイカ『富研号』ができあがりました。

あるとき、善太郎は、種屋で、質の悪い種が売られていることを知りました。

(こんな種でおいしいスイカが作れるわけがない。よし、わたしがおいしいスイカのできる質のよい種を作ろう。そしてたくさんの農家の人にいいスイカを育ててもらおう。)

と考え、スイカの種取りを始めました。たくさんの種を取るためには、たくさんの畑が必要です。善太郎のやり方にさん成し協力してくれる周りの農家の人たちとともに、スイカの種取りをしていきました。

ところが、戦争が始まると、善太郎は、スイカを作ることができなくなりました。スイカはぜいたくだということで、スイカ畑は、いも畑に変わってしまいました。

戦争が終わって数年がたったある夏の夜、暑さでからからになった畑には、水やりをする善太郎たちの姿がありました。井戸は畑から100メートルもはなれていましたが、善太郎は息子と二人でおけにくんだ水を何度も何度も運びました。それでも、次の日のかんかん照りで土はあつという間にかわいてしまいます。来る日も来る日も、水やりを続けました。そして、11月のはじめ、茶わんくらいの小さなスイカの実ができました。

善太郎は、このできたばかりのスイカをやっと出会えた宝物のように見つめました。

善太郎たちのスイカに対する熱い思いによって田原本町で取られたスイカの種は全国に広まっていきました。そして、今も、善太郎のあとを受けついだ人たちによって新しい品種のスイカの種が作り続けられています。

○ 板書

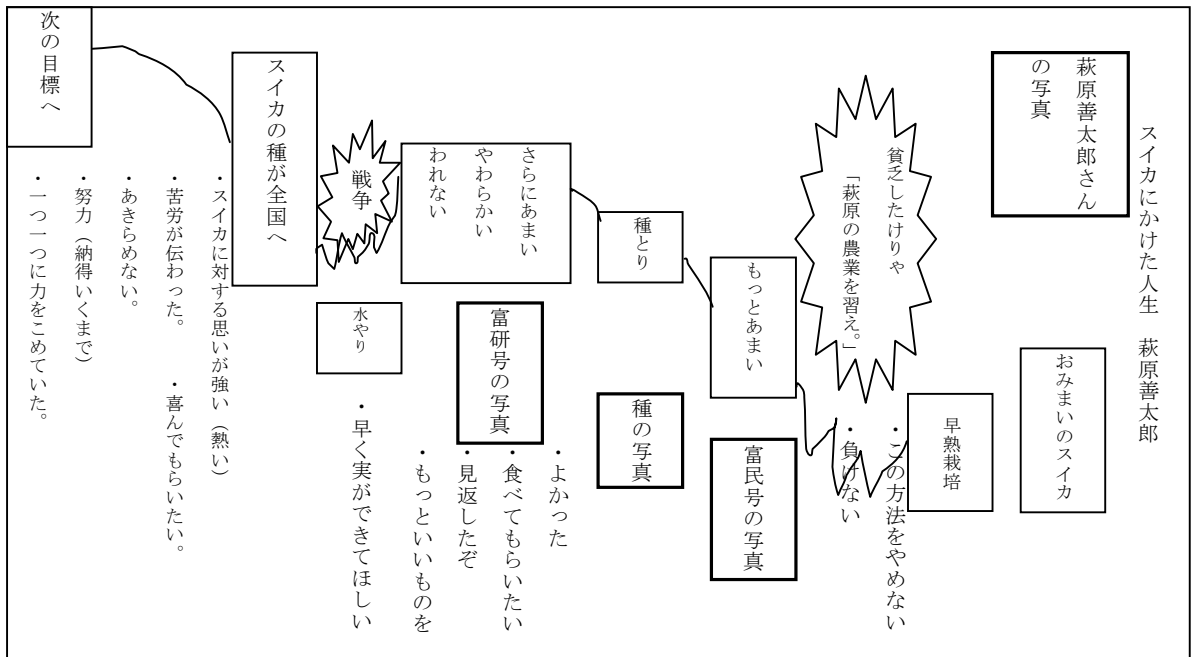


図1 授業で書いた「スイカにかけた人生 萩原善太郎」の板書

## 5 考察

導入で、中学年の学習を想起させると、「その人物について聞いたことがある。」「教科書で見たことがある。」と、積極的に意見を発表する子どもたちの姿勢が見られた。自分たちの町出身の萩原善太郎氏を取り上げたことにより、資料を範読するときも、子どもたちは興味津々の様子であった。

中心発問「なぜ、スイカの種を全国へ広めることができたのだと思いますか。」では、子どもたちの考えをより深めるためにワークシートへ記入させた。

- ・善太郎さんの努力が伝わったから。
- ・善太郎さんの気持ちがこもったスイカだったから。
- ・戦争でスイカ畑がいても畑になっても、あきらめずにスイカを育て続けたから。
- ・何があってもくじけなかったから。
- ・みんなに喜んでもらいたい、という気持ちをずっともっていたから。
- ・自分が納得するまで努力を重ねたから。

など、ねらいの「現状に満足せずより高い目標をもち、今、自分ができることを精一杯し努力しようとする態度を育てる」につながる様々な考えを書いていた。

その後の話し合いでは、「〇〇さんと似ていますが・・・。」と自分なりの言葉で発言したり、「〇〇さんと少し違って・・・。」と自分の考えを言ったりと、互いの意見を認め合いながら交流することができた。

授業が終わった後、「自分たちの町にこんなすごい人がいたんだ。」「自分たちの町にこんな人がいてうれしい。」「スイカに一生をつくして、その話は本当かな？と、うたがってしまうくらいすごい人だと思った。」など、子どもの心に萩原氏の努力し続けた生き方が響き、萩原氏のことを誇りに思っている感想を聞くことができた。郷土の先人を扱ったことによって、より親近感をもち、意欲的に学んでいたことを実感した。

展開の後段で、今の自分と萩原氏を重ねて考えるよう、「今、自分ががんばっていること。」を聞いたが、「萩原さんの生き方で似ているところはないか。」「萩原さんの生き方で参考になったところは。」「萩原さんの生き方と自分の生き方の違うところは。」などの発問の方が、より萩原氏の生き方と自分を重ねて考えていくことができたのではないかと考える。

終末の場面では、指導者の説話で余韻をもたせたが、萩原善太郎氏のお孫さんのインタビューを活用し、萩原氏の生き方を深く印象づけるという方法も考えられる。

## 6 成果と課題

授業後の子どもたちの様子を観察していると、1学期にはすぐに弱音をはくような発言をしていた子どもが、体育の時間でのなわとびの練習やマラソン大会などで、自分の目標をもち、がんばろうとする姿が見られた。あまり丁寧に字が書けていなかった子どもが「字をきれいに書く」という目標をたて、がんばっている姿も見ることができた。学級全体として、「どうせ、ぼくにはできない。」「しんどいからやめとこう。」というようなマイナスの発言をする子どもが減り、それぞれの目標に向かってがんばろうとしている子どもが多くなったように見受けられた。

がんばり続けている理由を子どもに尋ねてみると、「ほめられたいから。」という返答だけでなく、「途中で投げ出すことは気持ちをもやもやさせる。」「目標を達成した時はすがすがしい。」「がんばると、スッキリした気持ちになる。」という答えも返ってきた。それぞれの目標に向か

ってがんばっていこうとする子どもたちの生活の様子から、萩原氏の生き方を通して道德の時間に考えたことが子どもたちの心に響いていると感じている。

地域の素材を生かした自作資料は、資料化に時間がかかるが、子どもたちはより身近に感じ、意欲的に学習し、道德的価値の自覚をより深めることにつながっていくと考える。また、素材となる先人等に教師自身が感動を覚え、思い入れをもった指導となることで、子どもたちの心により強く響き、より魅力的な道德の時間づくりにつながるのではないかと考える。

今回の資料は、萩原氏の生き方に迫るため、理想に向かって、希望をもってくじけずに取り組んだエピソードを組み合わせた内容となったが、話し合いを焦点化しきれなかったきらいもある。ねらいによっては、一つのエピソードを中心にまとめていくことも考えられる。

## 7 おわりに

道德の時間を魅力ある時間とするために、地域の素材を生かした資料の開発に取り組んだ。資料を通して意欲的に話し合う子どもの姿や、資料を基に道德の時間に萩原氏の生き方について考えたことが響いている授業後の子どもの姿を見ることができた。地域の素材を生かした資料を基にした道德の授業に子どもたちは魅力を感じていたと考える。

道德の時間をさらに魅力的な時間とするために、今回の授業を通じた研究を生かし、地域の素材の収集、資料化に、今後も継続的に取り組んでいきたい。

## 参考・引用文献

- (1) 文部科学省（平成 20 年）『小学校学習指導要領解説 道德編』東洋館出版
- (2) 文部科学省（平成 14 年）『小学校 心に響き、共に未来を拓く道德教育の展開』
- (3) 新村出 編（2008）『広辞苑第六版』岩波書店
- (4) 田原本町教育委員会（平成 18 年）『わたしたちの田原本町』
- (5) 萩原善太郎（昭和 42 年）『西瓜人生－「わが人生録」から－』富民協会